

平成 22 年 12 月 8 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 22 年 第 11 回講話

おはようございます。朝方結構な雨でしたので、毎朝日課にしているウォーキングが出来ませんでした。聖橋に着いたらこんなに晴れまして、ほんのわずかな時間の差で、天気はこんなに変わるものかと感じました。目の前は土砂降りでも、一瞬のうちに晴れることもあります。

世の中の情勢も、天気と同じで一瞬のうちに変わります。日本の国の政治・経済の情勢も、晴れているけれども突如として雨になったりします。そこらへんを意識しながら、来年は世の中をよく見つめていきたいし、その上で行動していこうと思っています。

今年一年を振り返って・・・

前回申しましたように、1 年分お聞きします。皆さん考えて来てくださるようお願いしておりましたが、如何でしょうか。では、お聞きします。

今年 1 年間、嘘をつくことが非常に少なかった人？

毎日嘘をつかないということの日課に組み込んでいる人は、ずっと手が拳がると思います。嘘をつかないで過ごしていると非常に爽やかですから、来年はもっともっと爽やかにいきたいものです。ニュースを見ていると、又、この人は嘘をついているなとか、人相が悪くなったなと感じる人がいます。嘘をつけばつくほど、人相が悪くなります。時々、鏡で自分の人相を客観的にご覧になるとよろしい。我ながら良い顔になったなと思う時と、険悪な顔になっていると感じる時があると思います。その時その時の心持ちが反映されるからです。ですから 1 年分まとめて、暮れにご覧になるとよいでしょう。

今年 1 年間、良い年だったなと思える方？

手が拳がらなかった人は、余程悪いことがあったのだらうと思います。それを丸めてふっと飛ばせるかどうかが肝心です。自分の意識の中に困った問題があっても、時間が解決します。時間が解決するか、ボケるかです。ですから困った問題は意識的に、< 10 年後、この問題を考えたらどうだろうか・・・ > と思うと意外と解決できます。大きな問題で死

ぬか生きるかだと思っても、10年後に自分の意識を飛ばして眺めて見ると、意外と処理できるものです。良い年だったなと最後に思うほうが、来年には繋がります。

今年1年を振り返って、「有難う」と言い、「有難う」といわれた回数が多かったと思う方？

皆さん考えて来られたようで、手の挙げ方が早いですね。

「四季だより」20余年

もう一つお聞きします。

ちなみに今、私は人脈の整理をしています。年賀状を出す枚数を減らそうとしています。私は1年に4回、年賀状を出すつもりで四季だよりという葉書を出しています。もう20年以上になりますが、1年に4回、ずっと葉書を出し続けています。一番最初は、或る新聞社の社長とお喋りをした時に、「深澤社長と会ったのは、もう1年くらい前になるんじゃないですか。ちょっとは連絡をくれたっていいじゃないか・・・」と言われたのがきっかけで、葉書を出しました。そうやって四季だよりを差し上げていると、例えば、学生時代にお世話になった先生から会いたいと連絡戴いて、「君とはしょっちゅう会っている気がするから、そんなに経っているとは思わなかったよ」と、20年くらいお会いしていないにもかかわらず、気楽に電話を戴けます。年に4回葉書で近況報告をしていると、相手の方はしょっちゅう会っているような気分になるのだと改めて思われました。前回出した葉書に、「今年は体重を12キロ落としました。これからは筋肉回復です。20代の身体に戻したい」と書きましたら、結構反響がありました。ですから長いお付き合いをしたいと思う方には、それとなく近況報告しておく、ずっと人脈は繋がっていると感じます。その点、葉書は便利だと思います。

ということで、人脈は棚卸しをした方が良いでしょう。1年に一度、棚卸しの時期です。私は今、減らそうとしてどんどん整理していますが、人によって、人脈(人の縁)を広げたいと思っている人もいらっしゃると思います。

そこで質問です。年初に、今年は人脈をどのようにしようと考えたと思います。考えたような形で1年締めくくれるかどうかお聞きします。

人脈についてこうしようと考えて、それが思った通りになったという方？

皆さん結構手が挙がりました。

何も考えないで1年を過ごすより、1年の初めに何か、<今年はどういうことをしたい>と考えるとよろしい。そうすると、年末に締めくくりをしたいと思います。

今日の新聞におもしろい記事がありました。世の中は駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた

草鞋を作る人という諺がある。泥縄でも縄を縛えばまだ何とか救いがあるけれども、今の民主党政権は泥縄の縄すら作ろうとしない、という記事でした。全部先送り先送り、見過ごしの状態です。菅さんは市民運動を始めた時から、総理大臣になろうと思ってコースを定め、だいたい思った通りに歩いて総理大臣になりました。総理大臣になるところまでは狙い通りだったわけですが、総理になったら何をするという部分が欠けていたので、今、困っています。〈総理大臣になったら、こういうことをしたい〉という志を持って総理になったわけではないので、目の前の事情にじたばたと慌てて、結局判断できずに先送りせざるを得ない。総理大臣になりたいという初志を貫徹してしまったから、菅さんはもうやることがないわけです。やりたいことがないのだから、色々な問題が出て来た時に、どう処理するか判断が出てこないのだと私は思っています。

反面教師で考えれば、やはり1年の初めに、〈今年はどういうことをしたい〉というものを持てば、色々な問題が出て来ても判断基準をベースに手が打てると思います。

ですから人脈について、人とのつながりを大切にしたいという部分で、皆さん思い通りになっているのは非常に良いことだと思います。

今日の論語

では解説を致します。本日の論語は雍也第六 21～28です。

【二十一】 しいわ子曰く、ちしゃ みず たの知者は水を楽しみ、じんしゃ やま たの仁者は山を楽しむ。ちしゃ うご知者は動き、じんしゃ しず仁者は静か
ちしゃ たのなり。ちしゃ たの知者は楽しみ、じんしゃ いのちなが仁者は 寿 し。

孔子が言うには、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動くことが好きであるし、仁者はじっと静かにしているのが好きである。知者は活動型なので楽しみを多く見つけることが多い。仁者はどっしり構えているので、寿命が長い。

知者は水を楽しむというのは、心の問題です。水はある時は激しく流れるし、ある時はゆったり流れる。自由自在に流れて止まないものが水です。対して、山はどっしりして動かない、安定感・重量感が非常にある。

自分自身は知者のタイプか仁者のタイプか、動か静か、活動型か安定型かを考えてみるとよいでしょう。

渋沢栄一さんの『論語講義』では、活動型の人間として大隈重信を挙げています。ただ

し、活動型であるが謙遜の美德がない。色々なものを聞いて、それをこなさないうちから断言するタイプなので、周りから非難されることが多いともあります。

更に活動型の人物として江藤新平を挙げています。江藤新平は非常に博学であるが性格的に残忍で、人と会っても悪いところばかりを見てしまうとっています。そういう性格が災いして、江藤新平は佐賀の乱を起こして親玉に担ぎ上げられて殺されました。江藤新平を生かしておいては何をするか分からないと考えた大久保利通によって、即座に斬首の刑に処せられたのです。大久保利通がいなければ、おそらく斬首にはならなかったであろう、と渋沢栄一さんは残っています。

ちなみに大久保利通は、人を引き立てることが上手でした。伊藤博文も大久保利通に引き立てられて、世に出ています。

【二十二】 しいわ 子曰く、せい いっぺん 齊 一変せば、ろ いた 魯に至らん。ろ いっぺん 魯 一変せば、みち いた 道に至らん。

齊の国が一変（改革）すれば、魯という理想の国（今は理想ではないが、ある程度理想を目指している国）と同じような国になることが出来る。今の魯が一変（改善）すれば、礼の教えを重んじて真を尊ぶ、人間としてのあるべき道を実行している理想の国になることが出来るだろう。

渋沢栄一さんは「明治維新によって、齊より一変して魯を通り越し、直ちに道に至った」という書き方をしています。日本という国が明治維新という大変革を経験したことによって、齊から魯、弱国の魯から理想の国に至るという普通の順序を経ないで、一変に理想的な国家に変わった。日本は明治維新で理想的な国家に変貌したのだとっています。もっとも渋沢栄一さんは、明治新政府には仕えないと決めていた説をまげて任官したのですが、その理由は、大隈重信に「今、日本は八百万の神を必要としている。八百万の神が集って新生国家を作る。君もその神々の一人となれ」と口説かれたからです。そういう目で見ると、今の日本は理想的な国家であると渋沢栄一さんは思っていたわけです。「大変革があった時は、通常の段階を経ないで理想まで一氣に行ってしまうことがある。国家として日本が大きな例である」と残しています。

又、渋沢栄一さんは経営者についても同じようなことを言っています。大変革の時には、ジェットコースターのように一氣に上ったり・落ちたりということがある。倒産ギリギリの経営者が、突如として新興成金になる事は良くある。大変革の時に用心することは礼である。礼儀という教えを大事にしていけないと、転げ落ちることがあると解説しています。

ちなみに来年は、そういう変革の年にあたります。来年の干支については、後ほどお話しします。来年は辛卯です。

「辛」は、辛く酷く苦しいという意味です。

「卯」は、安岡正篤先生流に言えば、萱とか芒が繁茂している。繁茂している複雑な問題を処理しなければならない年回りという意味です。加藤常賢先生が書いておられるのは、馬の轡（くつわ）です。馬を連れて行く場合、轡をがっちりはめて引っ張っていく。強制力をもって人を処するという意味があります。原義そのものは、いけにえの羊や牛を殺して神様に供するという意味です。「卯す」と書いて「ころす」と読みます。うさぎ年ということで世の中に広がっていますから、それはそれでよいだろうと思いますが、兎とは直接的には関係ありません。

ですから来年は、辛く酷く苦しい年で、かなり殺す・殺される人が多い年回りになります。あまり良い年ではありませんね。よほど氣を引き締めて対応していかなければならないと思います。昨年の初めの季刊誌「知足」に書いてありますので、もう一度お読み戴ければと思います。

【二十三】 子曰く、觚 觚ならず。觚ならんや、觚ならんや。

孔子が言うには、昔の酒杯は良かったな。今の酒杯は形が変わっているから、飲む氣がしない。

觚は、青銅で作った酒杯です。それが戦国時代になると漆器の盃に変わってしまった。世の中が道徳的に頹廢し、周りの国を見ると享樂的な遊びが増えている。こんなことでは仕様がないなあ・・・と、觚という酒杯に例えて、従来の良い習慣がどんどん廃れていくことを嘆いています。

【二十四】 宰我問いて曰く、仁者は之に告げて井に仁有りと曰うと 雖も、其れ之に從わんやと。子曰く、何為れぞ其れ然らんや。君子は逝かしむべし、陥らしむべからざるなり。欺くべし、罔うべからざるなりと。

宰我が孔子に、「井戸に人が落ちていると告げられたら、仁者というものは直ぐに飛び込んで助けようとするでしょうか」と意地悪な質問をしました。

孔子が言うには、どうしてそんなことをするだろうか。君子は道理があれば井戸までは

走っていく。しかし井戸の中に飛び込むようなことはしない。本当に井戸に人が落ちてい
るかを確認し、助ける手立てを考えて行動するので、無分別に井戸に飛び込むことはしな
い。仁者は道理に基づいている話であれば騙すことはできる。しかし道理に基づいていな
いことで騙すことは出来ない。そこまではかではない。

孔子が腹の中で、けしからんと思っている感じが伝わってきます。

【二十五】 しいわ 子曰く、くんし 君子 ひろ 博く ぶん 文を まな 学び、これ 之を やく 約するに れい 礼を もつ 以てせば、またもつ 亦 そむ 以て畔かざ
るべきかな。

孔子が言うには、君子は沢山の文献を調べ、得た知識を礼の考えで統一するならば、人
間としての正しい道から外れたりしない。

色々な文献を調べて学んで自分の知識に入れていくことはできるけれども、それを行動
につなげる時には、やはり礼という判断基準がベースでなければいけない。ただ知識だけ
増えるのはよくないと捉えればよろしいでしょう。

今の学者の人たちは知識は沢山あるけれども、それを発表するのに、自分の身過ぎ世過
ぎで使っている人が結構多い。発言をよく追いかけてみると、最初に言っていたことと今
の言葉が 180 度違うようなことが結構あります。その人の判断基準がぶれるか・ぶれない
かを見ると良いでしょう。

【二十六】 し 子 なんし 南子 み を しる 見る。 しる 子路 よるこ 説 ふうし ば これ ず。 ちか 夫子 いわ 之に よ 矢いて ひ 曰く、 ところ 予 た が た 否 た なる た 所 た あ
ら てん ば、 これ 天 た 之 た を た 厭 た ん。 てん 天 これ 之 た を た 厭 た んと。

南子というのは衛の靈公の夫人で、多情多淫、美貌の持ち主です。

そのような女のところに孔子が会いに行ったので、子路が「なぜあのような淫らな女性
に会うのですか」と孔子に詰問したわけです。

それに対して孔子が「私がもしも邪な気持ちで会うようであれば、天が私を罰するであ
らう」と後ずさりしながら、子路に対して誓ったような状況を想像します。

【二十七】 しいわ 子曰く、ちゅうよう 中庸 とくた の徳 そ 為 いた るや、たみ 其 すくな れ ひさ 至 ひさ れるかな。 たみ 民 すくな 鮮 ひさ き ひさ こと久し。

「中庸」とは洪沢栄一さん曰く、「物に触れ事に臨んで臨機応変に変化し、結果として常

識に外れぬものが中庸の徳である」と解説しています。行き過ぎたり足らな過ぎたりしない、そういうものの徳がなくなってしまったので、孔子が慨嘆しています。

孔子が言うには、中庸の徳というのは何と完全無欠か。我が国の人民を見ていると、中庸の徳というものがなくなってから何と長い時間が過ぎたものであろうか。

日本に限らず世界各国を見ても、中庸の徳がなくなって久しいと感じます。昨年私が訪れたブータンという国は幸せの国と言われ、国民は精神的に満足しているということですが、やはり中庸の徳は欠けていると感じました。

【二十八】 子貢曰く、如し博く民に施して能く衆を濟うこと有らば、何如。仁と謂うべきかと。子曰く、何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。堯舜も其れ猶諸れを病めり。夫れ仁者は、己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く譬を取るは、仁の方と謂うべきのみと。

子貢が孔子に「国民に恩恵を施して大衆を救う。そういう能力を持っている人であれば、仁と言ってよいですか」と聞きました。

孔子が答えるには、そういうことが出来るのであれば、仁に留まるものか。しいて言うなら聖人であろう。聖人の皇帝と言われる堯や舜ですら、それはできなかった。悩みの種であった。だから我々が仁を目指すには、自分が身を立て志を立てようと思ったなら、まず他人を引き立てようとする。自分が大きな仕事を成し遂げたいと思ったならば、周りの人を助けてあげることが先だ。自分が何かやりたいと思ったならば、周りがやりたいと思うことを手助けして賛同者を増やすのが先だ。仁を求めるのに、山奥に入ったり滝に打たれるような荒行をしなくてもよい。自分の生活をしている街の中で、自分自身の身近なところで仁を求めるのが良い。それでなければ、仁が身につくものではない。それが仁を得る手段であろう。

個人の自立というものは、他人の自立を協力するところから始まって、だんだん自分の周囲に仁という良い考え方を広げていくものだということです。

「博く民に施して能く衆を濟う」というのは、善政（良い政治をすること）を表しています。渋沢栄一さんは、権力の過不足がなく、うまく調和しているのが善政であると解説しています。権限を持っている治世者と民間側で権限を持っている国民の側、それぞれが満足して、両方が一つの目的に向かって国会意思で進んでいく。それができれば善政を布い

たと言えるであろう。渋沢さんはそういう考えの下、国側の動きと、民間側の動きを銀行をベースとして広げていったわけです。

渋沢さんが銀行家として目指したそういう考え方を、今の銀行のトップの人たちと会ってぶつけてみても、全く響かないというのが正直なところですよ。銀行が日本に誕生した時は、どういう経緯で、どういうものの考え方でお金を貸したかということを中心に勉強していない。銀行家もどんどん小粒になるなと感じています。せめて少しぐらいは論語を読んでもらいたいと思って勧めているところです。

来年の干支 辛卯（しんぼう・かのとう）

先ほど干支から見た来年の話をお話ししました。

来年のことを考えると、絶対に我々が持っていなければいけないのは、基本的な哲学です。中斎塾で何度も申し上げている「足るを知る心」、「ほどほど」という考え方は、哲学に属します。

哲学の次は、知識・見識・胆識が必要です。

知識は色々な情報網から情報を取る。友人から聞いてもよいし、新聞やテレビ、ネットから情報を得てもよいでしょう。色々な情報をとって知識を増やしていくと、どこかでカチンとぶつかるものがあります。それらを読み過ぎさないで、書き留めておくことが肝心です。物事を判断しなければならない時に、そういう知識が役に立ちます。

知識が溜まってくると、例えば1月に入った情報と、3月に入った情報を照らし合わせてみると情報が発酵します。情報と情報がぶつかり合って、新しいものになってくる。単純に知識だけを入れている学者や有識者は、知識がずらっと並んでいるだけです。引き出しから情報を引っ張り出して、Aという知識とBという知識を人間の心の中で融合させて、新しい情報に変えていく。その作業をすることによって見識になる。見識とは、何か問題が起きた時にそれをどう処理するか、処方箋を描くのが見識です。

最後の胆識は実行力です。色々な情報が入って知識となり、それをこう処理すべきだという見識、そして最後に実行力になります。

胆識までいなくても、見識がしっかり根づいて、<自分はこう思う・こう考えている・こうすべきだ>というものが発信できれば、知らず知らずのうちに大局観が身につきます。日本の立場、世界の中で置かれている立場はどういうものかが、知らず知らずのうちに身について来る。大局観が自然と出てくるようになれば文句はない。その大局観の下で、具体的な目の前の対応をしなければならないと思います。そういうことを、来年1年

間を通じて実行されるとよろしい。

今朝は秋葉原のビジネスホテルに泊まっていたので、聖橋の事務所まで歩いて 1300 歩、その間にコンビニで新聞を買って読みました。木内先生は新聞を 6 紙見て、赤ペンを引いておられた。そういう作業を通じて、知識を比較検討しながら頭に入れていくという作業をしておられました。「世の中の物事は予測をすべきだと、予測学というものをこれからやりたい。もし予測が外れたら、なぜそうなったか反省をすれば良い」と言われていました。

私も木内先生に倣って、1 月号の季刊誌に来年の予測と反省を書きました。お手元に届きましたら読んで戴きたいと思いますが、その中で、こういう事を書きました。

 昨年の初めに、「今年は収入が激減して、生活用品はどんどん値上がりをするだろう」と書きましたが、実際それほど値上がりをしませんでした。なぜ、値下がりしたのかを考えてみますと、販売する側が自分の身を削って安く提供する執念を見誤りました。

 例えばイオンやニトリといった大手スーパーは、世界各国から安いものを仕入れたり、安いものを作らせています。値下げをするということは、自分で自分の身を食っている。社員の給料を減らし、外注費を削って、自分の身を削って安くして売っているのですから、長く続くはずはないと思っていました。競争相手がいて、お互い値下げ合戦をやり続ける、その執念を見誤りました。ギリギリまで身を削るという執着心は、途轍もないものがあるなと思いました。大きくなったスーパーを見ても、経営者の執念が凄まじい。特に創業者が生き残っていれば、なおさらだと感じます。

 終戦直後、日本の国が食べものがなくなった時に、家庭の奥さん達は農家に米を買出しに行く。ヤミ米を背負って列車に乗ると、そこに警官が見回りに来る。せっかく買ったお米を没収されまいと、熾烈な戦いをしていたわけです。私の家内の母親は、終戦直後、妊婦手帳を持っていたので、お腹にお米を隠して買出しをしたそうです。必死の思いでヤミ米を買って、家族を食べさせたわけです。これはどこの家庭でもあった話のようです。つい 60 年前はそういう時代でした。生きるための執念は凄まじいものがあります。

 今年の干支は辛卯です。先ほど申しましたように辛く・酷く・苦しい。そして命の絶たれることが非常に多い年です。安岡先生の干支学では 60 年周期でものを考えます。今から 60 年前は昭和 26 年（1951 年）です。私がこういう年回りを見る時に考えることは、大きく社会状況が変化する時は、自然災害が襲っています。昭和 26 年 2 月、東京を猛吹雪が襲っています。3 月と 4 月に三原山が大噴火しました。10 月はルース台風が襲来して、死者・

行方不明者が 1200 人出ています。120 年前は明治 24 年（1891 年）です。この時は帝国議事堂（国会議事堂）が出火して数時間で焼け落ちました。10 月の 28 日、濃尾地震が起きて 7272 名の死者が出ました。ということで、人的災害もあるけれども自然災害も大きなものが起きていました。

日常生活面では、来年はえげつない商売が出てくるだろうと思います。孔子は道端で売っている食べ物は食べないとか、氏素性のきちんとしたものしか食べないと論語に書いていますから、かなり衛生面の発達した人だったようです。来年は衛生面の不確かな食糧がかなり売られるだろうと思います。昔話に、美味しい魚を売りにくる行商人の魚が蛇だったという話がありますが、ひょっとするとスーパーで売っている刺身の盛り合わせは、あちこちの産地の魚であったり、売れ残った刺身をパックし直したものになるかもしれません。特に安く売っているものは、そういう危険性が高いと思います。一時期、私は中国産と書いてある食品は買いませんでした。これからは中国産などということを書かないで売るのも当たり前になると思います。来年は特に出自が明らかでない、生産国や産地がはっきりしないものも売られるようになる危険性が高い。ですから伝染病が起きうる可能性が十分にあります。食品を買う時は、よほど注意しながら買わないといけません。産地偽装や賞味期限のごまかしなど、一昨年あたりは随分騒がれましたが、来年は結構同じような話が出てくると思います。それがマスコミを賑わすかどうかは別として、食べものは相当注意をしなければいけません。命を守るという観点で商品の選別をしなければいけないと思います。

非日常生活の場合、辛卯という年回りで見ると、やはり災害が起きています。ですから最低限 3 週間分くらいの食糧を備蓄しておくのがよいと思います。ただ備蓄するのではなく、時々確認することも必要です。いざという時に消費期限が過ぎていたのでは困りますから、少なくとも 1 年以内に消費するサイクルを考えるとよろしいでしょう。

食べ物・飲み物等に関しては、日常生活の用心と非日常生活の用心の両方を今のうちにされると良いと思います。

それから伝染病対策については、手洗い・うがいが又、強く言われると思います。これは、家の外で手洗い・うがいをするような習慣が出来ればよろしいし、そういう設備も必要でしょう。そういうことが出来れば、ウィルスに侵される可能性はかなり減ると思います。病院に行く回数が多い方は、マスクをして下さい。以前何回もお話した新型の鳥インフルエンザは、それ用のマスクにしなければいけません。先日も鳥根で鳥インフルエンザが発生しましたが、たしか強毒性でした。今は強毒性が当たり前のように出てきますから、マスクの見直し等の対処も必要です。

新聞記事から

最後に、今日の新聞で気になった記事を申します。パッと写真が目に残りました。閣議が開かれる応接に首相が入室すると、他の閣僚は立ち上がって向かえるのが普通です。しかしこの写真は、仙谷さんと岡崎国家公安委員長がお喋りをしていて、まるっきり無関心で立ち上がるもしない。これは酷いなと思いました。緊張感がない、緩んでいると感じます。もう一つ、歌舞伎役者の記者会見の写真がありました。なぜこんな記事を書けるのかと思います。

小さなコラムです。首相が記者会見で質疑の状況をNHKが流していた。その放送が30分で打ち切られてしまったというものです。首相の権威がないがしろにされている、そういう記事が増えていると感じました。

他には、ロシアが日米の合同軍事演習を妨害したというニュースも載っていました。

尖閣諸島で中国が出てきたのは、止むに止まれず中国はそうせざるを得なかったという解説もありました。日本の国力がどんどん落ちている。周りの国がジャブを放っているということが出ていました。そういった記事にも目をつけると良いと思います。

後半は駆け足になってしまいましたが、これにて終了致します。

どうぞ良いお年をお迎え下さい。有難うございました。